

上海の多文化家族 中国人配偶者と上海で暮らす日 本人女性を中心に

その他のタイトル	Multi Culutural Families in Shanghai: Cases of Japanese Women Living with Their Chinese Husbands in Shanghai
著者	酒井 千絵
雑誌名	関西大学社会学部紀要
巻	45
号	1
ページ	47-72
発行年	2013-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/8400

上海の多文化家族

中国人配偶者と上海で暮らす日本人女性を中心に

酒 井 千 絵

Multi Culutral Families in Shanghai: Cases of Japanese Women Living with Their Chinese Husbands in Shanghai

Chie SAKAI

Abstract

This paper focuses on Japanese women who married Chinese men and migrated to Shanghai to reside with their husbands, based on 16 semi-structured interviews conducted from 2011 to 2012. In this marriage migration model, no obvious gap exists between the economic levels of Japan and urban China. According to our interviews, these women met their Chinese husbands in various ways. Respondents emphasized that they married because they recognized preferable partners; that is, nationality was not a factor. However, once married and situated in Shanghai with children, women were forced to reconcile the cultural and linguistic differences. Typically, they had to choose whether their children should be educated according to traditions of the Chinese, Japanese, or some other nationality to become “globalized” individuals. These decisions reflect the delicate sociopolitical power balance that exists that concerns marriage migrants who build their lives at the fringes of nation states. By examining the wives’ efforts to adjust to living in their husbands’ countries, we can understand some of the cultural conflicts that arise in the age of globalization, and thereby provide directions for public support for multicultural families.

Key words: International migration, Gender, Multilingual Education

抄 録

本稿は、2011年から2012年にかけて上海で行ったインタビュー調査に基づいて、中国人配偶者と結婚して上海で生活する日本人女性を中心に、国際結婚による多文化家族の現状と問題点を明らかにする。国際結婚では、女性が居住地を移動するケースの方が、男性が移動するよりも多く、経済的格差がその背景にあることも多い。そのため、国際結婚による異文化間ギャップの中で再生産役割を担う女性たちが、様々な困難に直面していることが明らかにされてきた。本稿の事例は2000年代に密接化した日中関係を背景としているが、このふたつの社会に経済的に大きな差異はなく、調査対象者も経済的に安定した環境で生活している。しかし、多文化・多言語環境で成長する子どもの教育や自身のキャリアについて、母親である女性が対処、交渉しなくてはならず、悩みが共有されいながら、周囲からのサポートが得られにくい状況が明らかになった。本稿はこうした彼女たちの語りを通して、グローバリゼーションにおけるジェンダー関係の変容と矛盾を考察し、多文化家族への公的サポートの可能性について論じる。

キーワード：国際移動、ジェンダー、多言語教育

1 はじめに

本稿は、2000年代半ば以降に増加した上海の日本人居住者の中で、特に中国人配偶者と生活する日本人女性の経験を通して、多文化的な背景を持つ家族が直面する問題と、そのジェンダー非対称性を明らかにする。

国際移動研究は、これまで男性の移住経験を主な調査対象とする傾向が強く、女性は同伴される家族メンバーとして言及されることが多かった。しかし1980年代以降、国際移動にジェンダーの変数が考慮されるようになり、また国境を越えて移動する女性が、数の上で男性に匹敵しているだけでなく、送出元と移住先の双方に、経済的、文化的な影響を与えていることが指摘された [Morokvasic, 1984]。カースルズらは、現代の国際移動が持つ特徴の1つに「国際移動の女性化」をあげている [Carstles and Miller, 2009]。

しかし、女性の国際移動経験は依然として把握しにくい現象であり続けている。女性は男性と比べて目的や動機、移住を促進／妨げる要素や、移住の結果こうむる変化など、移住のすべての過程において男性と異なる特徴を持つ [Piper and French, 2011]。主に労働を通じて社会と関わる男性の移住者に比して、女性の国際移動は、グローバルな社会変動が、家族や子育て、文化伝達をはじめ、ジェンダー関係に与えた影響を反映している。

国籍や出身国が異なる男女が結婚する場合、結婚後に居住地を移動する国際結婚移動は、女性に大きく偏っている [Constable, 2005]。国内での結婚でも、配偶者の都合に合わせて転居し、異なる文化や社会環境への適応を要求されるのは女性の方が多い。また、労働以外で移動することが多い女性を調査対象とする国際移動研究では、国際労働移動と、国際結婚をはじめとする家族結合移動とが区別されることが多かった。

性別を問わず、国際労働移住は、入国管理法によって定められた滞在資格などから実態を把握しやすいのに対し、国際結婚移動はそうではない。「個人的」な関係性が、国外での滞在資格を保障する結婚移住は、各国の入管制度や社会ごとによって異なるジェンダー関係や家族の役割が、移住に影響を与えているためである。また、日本の入管法では、結婚による移住者は「日本人の配偶者等」などの滞在資格を得るため、移住の選択においても依存的な存在と考えられがちである。けれども、結婚移住の当事者は、出身地と移住先の双方で、多元的な選択のプロセスに主体的に関わり、双方の社会が持つ家族や労働の規範を再構築する存在でもある。国籍・市民権を持つ者の配偶者が取得可能な滞在資格が、永住や市民権の獲得に直結するのか、就労などの社会活動を可能にするのかといった点も、国によって異なるのである。さらに夫婦双方の社会階層、送出元と移住先との文化的な距

離なども、移住経験を多様にしている。

また、女性は働くことを目的に国境を越える場合も、出身国に残してきた家族との関わりや、家族からの期待が、男性移住者と異なっていることが指摘されてきた [Parrenās, 2001]。同様に、結婚が主な移住動機に見える場合であっても、家族との関わりだけでなく、どのような仕事につき、収入を得るのか、または得ないのかということが、当事者にとって重要な関心事となっている。結婚による移住が男性に比べ女性にとって重要なのは、移動機会が相対的に限定されているために、移住先の男性との結婚が、国際移動の機会を広げるためとも考えられる。

2 方法と対象

この論文では、筆者が2011年9月から2012年9月に、3回にわたり上海在住女性に対して半構造的インタビュー調査を行い、得られた16名のデータを主な分析対象としている。そのうち13名は、中国人の配偶者を持つ日本人女性、2名は非中国人男性を配偶者とする日本人女性、もう1名は日本で知り合った日本人男性を配偶者とし、最近中国に家族で移住した中国人女性である。

インタビューは、それぞれ1時間から3時間程度行った。一部の対象者には、複数回聞きとりを行っている。まず移住に関わる基本情報、たとえば、夫と出会い結婚した経緯、中国移住を決めた理由、将来の居住予定地などを尋ねた。さらに、移住前後だけでなく、日本での生活から現在の状況まで、できるだけ自由に本人の語りを聞くように心がけた。

本研究ではインタビュー対象者を、複数のルートから探している¹⁾。その結果、年齢や結婚の経緯、上海での人的ネットワーク、生活スタイルなどが多様な人々に出会うことができた。

まず、筆者は2004年から2009年にかけて、上海への国際労働移住とジェンダー関係の変容を調査し、日系企業で現地採用として働く日本人女性にインタビューを行った。そのうち、調査対象者の一部は、中国人男性と結婚した日本人女性だったので、中国での結婚や生活のことも含め、改めてインタビューに協力してもらえないかと彼女たちにメールで依頼し、2011年に話を聞くことができた。さらに、同じ調査で会った单身女性にも、中国人男性と結婚している知人の紹介をメールで依頼した。このルートで5名の日本人女性に話

1) 調査方法や対象者の選択を限定せずに、目的に従って様々な方法を混合することは、方法論をトライアンギュレーションや混合メソッドという視点から論じてきた N. Denzin の議論とも問題意識を共有している [Denzin 2010; 2012]

を聞いた。

また、複数の調査対象者に、彼女たちのネットワークの範囲内で、国際結婚をしている人を対象に質問紙の配布をお願いした。質問紙調査の目的は、上海で生活する国際結婚カップルから、結婚の年数や経緯などについて、基本的な情報を収集することと、インタビュー調査への協力者を募ることにあつた。合わせて20部の質問紙が戻って来たが、少数であることに加え、男性や中国人以外の配偶者を持つ人など、配布先が多岐にわたったため、分析を行うのに十分なデータは集まらなかった。しかし、質問紙を返送してくれた人の中に、インタビューへの協力を申し出てくれた者や、上海でのネットワーク、たとえば「老婆会 (Laopohui: 妻の会の意)」や「現地校母の会」のメーリングリストに、質問紙と調査依頼を流してくれた。そこからさらに調査対象者を広げることが出来た。

実際に会ってインタビューを行う予定を決めた後、ちょうど都合のついた国際結婚の友人がいるので同席しても良いか、と申し出てくれた人もいた²⁾。こうした形で会えた人は、非中国人だが中国で働いている外国人男性を配偶者を持つケースや、中国人配偶者を日本に残して、日本人である母親と子どもたちのみが上海に住んでいるケースなど、はじめの2つのルートではなかなか情報が伝わらない人の話を聞くことが出来た。

ほとんどのインタビューは、対象者の了承をとって録音したが、一部は、食事会などのインフォーマルな状況で行われたため、録音を行わず、インタビュー後にとったメモから再構成している。録音できたインタビューは、書き起こしを行った上で、相互に比較し、分析を行っている。

3 日中間の国際結婚

3.1 上海における日本人増加の背景

当事者を含む多くの人が、国内での結婚と同様、国際結婚を個人的なライフイベントと見なしている。自分が結婚した理由を、「単に気が合ったから結婚したのであり、別に国際結婚だからといって、日本人同士の結婚と比べて特に違いがあるとも思えない」と語る人が多いことは、こうした見方を反映している。

しかし、国境を越える資本やサービスの流れ、人の移動を引き起こす社会経済的背景、またこうした動きを促進したり制限したりする様々な入管政策が、国際結婚の機会増減に大きな影響を及ぼしている。もちろん、日本と中国で生じている国際結婚移動も例外では

2) 多くのインタビューは1対1で行われたが、このように調査対象者の都合に合わせて、2名、3名の人と同時に話をしたケースもある。

ない。

地理的、文化的に近い日本と中国は、1945年の日本の敗戦から1972年まで国交もない状態が続いた。しかし中国では1978年以降に改革開放経済政策がはじまると、日中間の経済的な結びつきは年々密接になっていく。

国際移動の増減を見ると、現在につながる日中関係の発展は、1980年代にさかのぼる。中国では、1970年代後半にはじまった改革開放経済政策が軌道に乗り、海外出国ブームが起こった。中国から日本への留学がブームになったのもこの時期である³⁾。だが、筆者が日中間の人の移動を研究し始めた1990年代には、北京や上海などの大都市でさえも、外国人が生活するためのインフラや生活制度が不十分だったこともあり、在留邦人数は余り多くなかった⁴⁾。これに対し、イギリス植民地時代に金融中心地として発展し、インフラや生活環境の整った香港に、多くの日本企業がオフィスを移し、在留邦人数も大幅に増加した。一方、1972年には中国から日本に入国した人の数は、わずか994人にすぎなかった。それが、1985年には10万人を越え、現在日本には70万人を上回る中国人が生活している。また、中国には14万人近くの在留邦人がおり、経済の中心である上海には、2012年現在、ニューヨークに次ぐ56,000人の日本人が生活している。

1990年代後半以降、中国経済が急速な成長を遂げ、多くの日本企業、日本人が中国に移った。大都市の交通や生活が便利になり、多くの企業と人が上海に移ってきたのは、2000年代以降のことである。その結果、これらの日本人を顧客とするサービス産業、たとえば不動産業や教育産業、レストランや商店、人材派遣会社等も、上海を中心に中国に進出した。また、中国の経済ブームは、中国に住む日本人が従来感じていた生活の不便を軽減させた。その結果、さらに多くの日本人が、中国で働きたい、中国語を身につけて自分のキャリアに生かしたいと考えて留学し、中国に移住するようになった。こうして日本企業で働く中国人も増加し、日本人と中国人が様々な形で出会う機会は増してゆく。

日本企業は、中国圏に生産拠点を求め、人の移動は相互に増大していく。日本人女性と中国人男性との結婚も、このような経済的關係から独立して考えることはできない。企業の進出や消費における日中間の關係に比べ、そこで実際に働き、移動する人々の生活や認識に対する関心は相対的に低かった。

3) 当時の中国人の海外留学・滞在を描き、大ヒットした『北京人在紐育』の続編は、上海出身の中国人が東京で苦勞する姿を描いた『上海人在東京』であった。

4) 1999年に北京に留学する日本人を対象に聞き取り調査を行ったが、その頃には、まだ留学生や個人で移住・滞在中の人たちが経済力に見合った手頃な住居に住むことも難しく、滞在資格も不安定なままだと言う人が多かった。

結婚と家族形成は、国境を越える、越えないにかかわらず、個人的な経験と見なされがちである。しかし、日中間の経済関係や政治的關係が変化中、個人が移動できる場所や、移動手段なども、時代によって様々に変化している。以下では、結婚にいたる出会いの機会、夫、妻双方の国際移動の契機を中心に、これを日中関係の変容と対応させながら、具体的な当事者の経験を分析していく。

3.2 結婚と移住の時期による相違

3.2.1 中国移住動機の多様性

日本人と中国人の国際結婚は、日本人男性と中国人女性が結婚して日本に住んでいるケースの方が、その逆に日本人女性と中国人男性の夫婦が上海などの中国都市部に住んでいるケースよりも多い [嘉本 2008]。これまでのデータでは、日本人女性の国際結婚は、アジア人男性よりは欧米人をパートナーに選ぶことが多く、日本人が欧米の文化や社会に抱く非対称な憧れと結びつけて分析されることも多かった [Kelsky 2001]。

本稿で調査対象となった16人の上海在住女性は、結婚と中国への移住の順序から、大まかに3グループに分けられる。第1グループは、夫に日本で出会って結婚した後中国に移住した人々、第2グループはまず女性が上海や北京に移住し、そこで出会った男性と結婚した人々である。第3グループは、日本でも中国でもない第三国で出会った男性と一緒に上海へ来た人々である (図1)。

第1グループは、中国人女性1名を含む6名である。彼女たちが上海に来た時期は1996年から2011年とばらつきがあるが、婚姻期間は皆10年以上と長い。第2グループは、北京あるいは上海に、留学や仕事を目的に移住した後、結婚した7名である。そのうち2人は1990年代に中国 (北京に1名、上海に1名)に移り住み、残りの5人は、2000年代に中国に来ている (北京1名、上海4名)。2000年代に中国に来たうち、1名の配偶者は中国人ではなく、上海で会社を経営する外国人男性である。第3グループの3名は、他の2グループと比べて多様である。1名は中国人男性と、もう1名は中国人以外の男性と、中国の外で留学中に出会い、2000年代に上海に来ている。もう1名は、1990年代にともに留学していたヨーロッパで出会って結婚し、一度は家族で日本に戻って生活した後に、2000年代に上海に移った女性である。彼女たちは皆、自分の意志で海外留学しているが、中国に移ったのは夫の決断によるものだった。

16人中13名は2000年代に上海へ移住している。これはサンプリングのバイアスであることを否定できないが、同時期に日中両国で移動が増大したことと関連があるだろう。

3.2.2 日本で出会い、中国に移り住む

第1グループの大半は、1980年代に中国から日本に留学し、その後日本で企業に勤めるなど、数年以上日本で過ごしていた夫と結婚した妻、という夫婦である。1組のみが逆に、妻が中国から日本に留学して、日本人の夫と知り合い、結婚していた。妻が中国人である夫婦を含む全員が、夫が上海で働くことになり、家族は一緒に暮らすべきだと考えて日本を離れた。

彼女たちの上海移住の経緯は似ているが、これに対する反応はふたつに分かれる。中国への転居は、結婚したときから予測していた自然な成り行きだったと語る者がいる反面、日本で生活し続けるつもりだったので全く想定外だったという者もいる。この違いの背景には何があるのだろうか。

日本で中国人の夫と出会って結婚した女性たちは、国際結婚ではあっても日本人同士の結婚とそれほど変わらないと話す者が多い。まず、彼女たちの夫は皆、日本で仕事するのに差し支えない、流暢な日本語を話すことができる。海外旅行先で夫と知り合ったチサコは、そのとき彼のことを日本人だと思ったと語る。ナミコを除く全員が結婚後しばらくは日本で暮らしており、家庭内の使用言語も日本語だった。夫たちは日本で永住権を保持しており、1人は夫が帰化により日本国籍⁵⁾を取得していた。

また、日本で知り合ったカップルの多くは日本で結婚して子どもを持つ。一組だけが中国に移住してから子どもが産まれていたが、いずれも子どもたちは日本の単一国籍であった。日本、中国のいずれも単一国籍の制度をとっているが、22歳までは重国籍が認められている日本より、厳格な単一国籍の制度を持つ中国では、子どもに中国国籍を取らせるのは難しいこと、また現時点では日本のパスポートの方が国外に出やすいことも、日本国籍を選ぶ理由のひとつであろう。

上海への移住を肯定的に語っていたナミコやヤスコは、夫が日本での仕事を辞め、中国新しい事業をはじめており、また経営側にかかわる仕事に就いていた。中国から留学した日本で10年以上すごしたシャオリーも、やはり新しい仕事を夫が始めるために、出身地である上海に移住していた。

他方、上海に行きたくなかったという者の多くは、夫が勤務する日本企業から上海に駐在員として派遣されていた。日本企業は、海外赴任者に辞令を直前まで知らせないことが

5) 日本で出会って結婚した中国人男性と日本人女性の夫婦の場合、夫が日本国籍を取るケースは、決して例外的なものではないと複数の調査対象者が話していた。結婚に際して、妻の親が日本国籍の取得を条件とするケースや、日本企業で働く便宜から日本国籍をとるケースなどがあるようだ。

多く、海外に派遣される本人にとっても、赴任地や期間に関して希望を通すのは難しい。日本で仕事に就いていた妻は、短期間の間に夫に単身赴任してもらうか、仕事を辞めて上海に子どもとついて行くかを決めることに負担を感じていた。

チサコは夫が転勤の辞令を受け取ったのは、出発の1ヶ月前だったため、「いきなり中国には行きたくない」と思ったが、十分に話し合う時間もないまま、夫はまず1人で赴任していった。彼女は、仕事の区切りがついたところで退職、子どもと日本でしばらく準備したあと、1年後に上海で家族一緒の生活を始めた。エリコは、やはり夫の上海赴任について転居したが、中国に住むことを結婚の時点では全く考えていなかったため、上海に移って7年たった現在でも「約束が違う」と話していた。

チサコやエリコは、日本に住んでいた時には結婚や出産、育児などの障壁を乗り越えて、頑張って仕事を続けてきたという自負を持っていた。中国人の夫は、会社の辞令で急に転勤になったとは言え、出身国である中国で働くことにより、言語やネットワークの面での利点があったと考えられる。しかし、日本で夫と結婚した妻にとって、これまで中国は年に1回程度夫の親族に会いに来る場所ではなく、新しい土地で生活を築いていくというストレスに直面することになった。

3.2.3 中国で出会う

中国で夫と出会い、結婚した調査対象者は、留学や仕事で上海や北京に自分の意志で移住した経験を共有している。つまり、彼女たちは、ほかの女性たちと比べると、もともと中国の社会、文化、言語等に強い関心を持っていたといえる。

ここでは、1990年代に中国に来た者が2名、2000年代に来た者が5名いた。これは、中国での留学や就業を目的とする日本人居住者の増加を反映している。1人をのぞく全員が、留学の後に日本企業で現地採用として働き、中国滞在を継続していた。彼女たちは中国滞在中に、職場やアルバイト先で、同僚や取引先として知り合った中国人男性と結婚し、現在も中国で生活している。また、ハナコは留学ではなく、日本語を教えていた勤務先の大学で夫と知り合ったと話していた。

彼女たちの中国移住の理由は様々だが、多くの対象者は、日本で働き続けても、昇進して責任のある仕事についたり、待遇が向上したりすることが望めず、先が見えないという感覚を共有していた。特に彼女たちは、日本では子どもを育てながら働くというイメージを持ってないと話していた。

3.2.4 第三国で知り合い、中国に引き寄せられる人々

日本と中国以外の第三国で知り合い、夫と結婚したという者は3人いた。日本では、アジアよりアメリカやヨーロッパ、オセアニアなどで、女性の移住者、滞在者が多く、アジアの在留邦人は男性が中心となる。英語が広く用いられるこれらの地域では、1980年代以降留学を目的に滞在する女性が男性を上回っている。その点で女性が増えてきたとはいえ、依然として男性の滞在者の方が多いアジアとは異なっている。

3人のうち、リサコは現在40代で、ドイツ留学時に中国人の夫と知り合い、数年間ドイツの日系企業で働いていたが、夫が日本にある外資系企業に転職したため、ドイツで産まれた子供を連れて日本に帰国した。しかし今度は夫が中国で仕事を果たしたため、家族全員で上海に移住した。ワカコとマリコは30代で、20代の時に英語圏に留学し、そこで出会った恋人と中国に転居している。ワカコの夫は中国人であり、マリコは留学先の男性（非中国人）と結婚している。

このグループの対象者にとって、中国はもともと彼らが選んだ場所ではないため、中国や上海への関心を、夫と共有していたわけではない。第1グループの女性と同様、彼女たちは夫の職業上の決断に従って、上海に住むことを決めた。しかし、海外居住については、自分の希望に添っていると考えており、中国に住み続けることには否定的であるものの、日本ではない場所で生活することには肯定的である。

3.3 上海で働く際の障害と就労ビザ

3.3.1 上海滞在のビザと労働許可

中国国籍を持たない日本人が中国で働くのは、たとえ中国人と結婚していても、容易なことではない。その理由の1つは、就労可能なビザをとる障壁であり、もう1つは、家庭責任とのバランスである。調査では、日本人の妻たちが言語や文化が異なる社会に適應するにあたり、自分だけでなく子どもたちの不安や困難にも気を配っていることが明らかになった。

まずビザの問題から見ていこう。基本的に中国人の配偶者や子どもは、親族訪問を目的としたLビザで中国に滞在している。日本の入管法では配偶者ビザの所有者は、就労ビザをとらずに働けるが、中国では、中国人の配偶者であっても、働くためには別途就労ビザであるZビザを申請しなくてはならない。またLビザの所有者は、毎年ビザの更新をしなくてはならない。相対的に厳格な中国の入管法は、中国人配偶者を持つ日本人女性が、中国で働くことを難しくしていた。

2004年以降、中国政府は「中国版グリーンカード」と呼ばれる永住権のシステムを作っている⁶⁾。中国人配偶者と結婚し、かつ中国に5年以上住んでいる外国人配偶者は、このグリーンカードに申請することが可能であり、調査対象者の中にもすでにこれを取得している者が数名いた。グリーンカード保持者は、就労が可能であるが、リサコをはじめ、永住権とは名ばかりで、10年で更新しなくてはならないグリーンカードには大きな価値が認められないと考える者もあった。しかし、永住権をとることで、Lビザ更新の手間やストレス、就労ビザ申請の必要がなくなることは確かに魅力的だといえる。カズコは、グリーンカードの取得によって、これまでは就労ビザのスポンサーであるため、交渉がしにくかった職場に対して、待遇や業績の評価を要求する事ができるのではないかと期待していた。

3.3.2 家族に対する責任と就労

夫の仕事の都合で日本での仕事をやめた女性たちは、中国に来たためにキャリアを諦めたと感じていた。たとえばチサコは上海に来る前には、大学卒業以来勤めていた公共団体で広報の仕事をしており、仕事をやめたくなかったこともあって、上海行きをためらった。中国に来て6年ほどたった今も、チサコは自分が突然専業主婦になってしまったことに居心地の悪さを感じている。

私はずっと働いていて、保育園とかに子どもを預けて。主人が先に、2006年に単身赴任で上海に来て、私はいきなり仕事を辞めて、いきなり中国には行きたくない、いろいろ整理したいということで、1年後に（子どもと一緒に）2007年からこちらに来ました。（中略）やっぱり結婚する時に、仲人の方に仕事は絶対に辞めませんと言っていたので、自分の中で仕事を辞めてしまったということに対する消化しきれない思いがいっぱいあって、やっぱり子どものこともやんなきゃいけないし、保育園と幼稚園もずいぶん違うんだみたいなこととか。組織にいて楽しかったことが、今度は家の中で自分の中のもので仕事見つけないといけないというのも結構大変でしたね。家事には限りがないし、仕事だと5時で終わって、ああすっきりと、時間が自分で線引きされているところが、家事とか家のことになると、仕事とは割り切れないようなものがあるじゃないですか。

6) 中国政府が2004年に永住権を設けた結果、2011年末までに4700人の外国人がグリーンカードを取得していた。2013年1月29日の人民日報日本版は、現在政府が永住権システムの改正を準備していると報じていた。

エリコもまた、上海に移る際に仕事を辞めていた。彼女も、もし日本に居続けていたら、仕事を続けていただろうが、上海では、就労ビザを持っていないこと、語学力や中国社会についての知識の不足で、仕事をするのは難しいと考えていた。加えて、チサコもエリコも、日本と中国の文化ギャップに悩む子どもたちの面倒を見るので忙しいと話していた。チサコは中国で働く気が持てない理由に、日中間の文化ギャップがあると話す。

もしここで働くなら、もっと中国語力を高めないと行けませんね。でも、私は、中国と日本の間にこれだけ文化の違いがあって、たとえば、簡単に期日や約束を破るとかの問題があるので、ここでは働くつもりはありません。

エリコは、2010年上海万博の時に、アシスタントのガイドを務めたことを良い思い出として語っている。多くの若い独身女性が一緒にアシスタントをし、そのうち20人ほどは、今も上海に残って仕事に就いている。エリコはこうした若年女性たちの勇気とオープンさに感心していたが、彼女自身は独身女性たちと同じように働くことをためらっていた。

3.3.3 安定した収入の男性と結婚して、働き手一人の世帯を築く

エリコとも親しいイツコは、日本にいたときから専業主婦であったことを、当然のこととして受け入れていた。エリコが、上海万博後も上海で働き続けている若い女性のことを肯定的に話すと、イツコは、彼女たちはできるだけ早く日本に帰るべきだと反論した。彼女が言うように、上海の日系企業で現地採用として働くスタッフの給与は、月1万円（約15万円）程度にすぎない。彼女は、このような低賃金では、「日本を完全に絶った生活」を送るならともかく、子どもを日本人学校に通わせるような生活は難しいし、賃金格差がある中国で結婚すれば、日本に戻るツテを失うだろうと考えていた。

マサコは、北京留学後、1990年代初めに香港人の夫と結婚した時から一貫して専業主婦であり続けてきたが、イツコと同様の考えを持っていた。夫は企業を経営しているため、彼女は基本的に夫の仕事の都合に合わせて香港、成都、上海と転居してきた。マサコは、上海で中国人の夫を持つ日本人女性は多いが、中国国内で生まれ、教育を含め中国で育ってきた「本当の大陸中国人」と結婚しているにはほとんどあったことがない、と言う。これは、日本と中国で賃金格差が大きすぎるため、恋愛はあっても結婚には至らないためだというのが彼女の考えであった。マサコによれば、中国に住む日本人妻の大半は、日本で知り合った中国人男性と結婚し、夫の中国現地法人への派遣について中国に来ている。日

系企業に勤める夫は高収入であるため、妻たちは共稼ぎを選ぶ必要がない。彼女は、仕事を持っている日本人の既婚女性はわずかにいるが、経済的に夫1人の収入でやっていけないためだと考えていた。つまりここでは、賃金格差のある中国で日本よりも所得の低い男性との結婚が、結果的に階層下降につながることは好ましくないと語られているのである。

他方、若い世代では、女性が仕事につくこと自体が否定的にとられているわけではない。ワカコは海外留学中に、同じ大学に留学していた中国人の夫と知り合い、一緒に中国に渡った。二人はまだ結婚していなかったため、上海に来て1年半余り、ワカコは大学の日本語講師として働き、中国に滞在するためのビザと仕事を確保していた。しかし、中国の大学は、講師が一つの大学に長く勤めることを嫌い、2年ほどで別の学校への転勤を義務づけていたことや、中国の大学の規則や文化になじめなかったこともあり、ワカコはしばらくすると仕事を辞めて、外資系企業で働いていた夫と結婚してビザをLビザに切り替えた。その後、子どもが生まれ、現在彼女は、お茶を日本人駐在員の妻に教えたり、知人に日本語を教えたり、という不定期な仕事しかしていない。

英語学で修士号を取っているワカコは、子どもたちを対象とする英語教室を開くことを目標にしており、情報を集めていた。しかし、まだ幼い娘を長く人に預けるのは良くないと考えているため、英語やお茶の指導などの仕事をこれ以上増やすつもりはあまりなく、ビザもLビザから変更する予定はないと話していた。彼女にとって、夫が主要な稼ぎ手であり、たとえスキルのある教師として働けるとしても、自分の収入をもっと増やしたいという思いは薄かった。

3.3.4 上海で働く

結婚後に中国に移住した対象者の中で、上海で仕事をしていたのは、夫が起業、自営業で働いているなど、上海での仕事に長期的な見通しがある者が多かった。ナミコは1990年代半ばに上海に移住した当初は夫の事業を手伝っていたが、後に、中国に進出する日本企業へのコンサルティング業を自らスタートさせている。また彼女は、上海で働く日本人女性の互助組織の立ち上げにも尽力していた。

ヤスコとリサコは、上海に移住し、まず基本的な中国語を語学学校で学んだあと、仕事を始めた。ヤスコは日系企業に勤めたこともあるが、現在は複数の日系企業で中国人に日本語を教えている。またリサコは、古い知人からの紹介で、外資系企業で働いていた。

娘が、(中国来たときには)1年生だったんですけど、現地校の学校に入れると、こ

うちの学校って朝から晩までで、5時に終わるんですね。帰ってくるのが5時なんですよ。下の子2歳だったんですけど、主人が「幼稚園に入れろ」って言って、幼稚園に入れたらそこも9時から5時なんですよ。それで、昼間やることなく、しょうがないから中国語習いにいって、半年ほどしたら、だいたい何となく買い物とか日常生活とか困らなくなったんですけど、それじゃつまらない。「毎日毎日（日本人の）奥さんとランチして買い物しているだけじゃつまらない」って言っていると、たまたまドイツの時の知り合いが「こっちで会社おこしたいから手伝って」と言われて、それで結局（働き始めた）。（リサコ）

また、上海で働いている女性は共通して、出産や移住の前後をのぞけば、働き方や仕事は変わっても、日本でも中国でも一貫して仕事をしている。他方で、リサコは、主たる家計収入支持者はあくまでも夫であり、自分は自分のために働いているという。またリサコは、夫は日本に住んで以来、妻が働くことに対してあまり積極的ではなくなったと考えており、妻が働くことを否定的に見る日本文化の影響とらえていた。

ドイツでは、子ども産んでも周りのドイツ人みんなそうだったんで、産休終わったら奥さんも戻るというのがふつうだったし、時短で働く人も多し、そういう気持ちでいたんですけど、日本に帰って私が働くといったら（夫が）あまりいい顔をしないで。というのは、主人が入った会社というのが、いわゆる大手だったんですけど、そこにいらっしゃる日本人の方は、だいたい奥さんが専業主婦だったんですよ。なのに、「ナンバー2で来た外国人の奥さん、日本人なのに働いているよ」みたいなことがあって、彼の考えも、「何で働かなきゃいけないの、食べさせられないわけじゃないのに何で？」みたいな。「でも私はうちにいられない」といって（働き始めた）。（中略）中国に戻ってきたら、働くのは、主人から見たら目上の会社の方から頼まれたということもあって、イヤとはいえないんですね。でも途中何度も、「もう辞めたら？」って。「お小遣いみたいなあれで働いてもしょうがないんじゃない」って。（中略）私の収入なんて、日本に行くときのおみやげ代くらいだろ、ということも言っていたんですけど。でも中国の主人の家族は、お母さんも兄嫁二人も働いていらっしゃるんで、（中略）女性が働いていても、旦那さんが面子がなくなるわけではないんで。

また、上海に自分の意志で来た対象者の多くは、結婚や出産の後も仕事を継続しており、

滞在ビザも就労可能なZビザのままである。タエコは、留学中に、パートタイムの翻訳者としてアルバイトをしていたが、そこで知り合った中国人男性とともに上海に転居し、結婚した。また、半年中国語を学んだ後、日系企業に就職したアヤコは、そこで知り合った同僚と結婚し、そのまま仕事を続けている。もちろん出産などでいったん仕事を辞める場合、滞在資格をLビザに変更する必要がある。サチコは1人目の子どもを産んだ後、母乳へのこだわりや、自分自身で育児をしたいという思いからいったん仕事を辞め、1年後に再就職をして、再びビザをLビザからZビザに変更していた。彼女は、自分の収入は家計の重要な一部であり、仕事を辞める考えはないと話していた。

3.4 多文化の中で子どもを育てること

3.4.1 多様な教育制度の中で子どもにあった学校を選ぶ

上海で子どもを学校に行かせる国際結婚の日本人女性たちは、選択肢の多さに直面する。マサコは、自分自身や友人の中には、子どもの学校を何度も変えた経験を持つ人がいるという。他方で、学校によって使用する学習言語が異なるため、特に学年があがってくると、学校を変えるのが難しくなる。様々な選択肢を検討しながら、彼女たちは、子どもたちの学習言語を日本語、中国語、英語の中から選ばなければならない。これは、子どもたちの将来の生活や仕事に直結してくる。

本稿では、幼稚園から高校生までの子どもを持っていた対象者15人のうち8人が日本人学校を選び、5人が英語で教育する学校を選び、2人のみが中国語の学校を選んでいた。このころ1人は、子どもがまだ乳児だったため、まだどのような学校がよいのか迷っているところだった。こうした学校選択は、調査対象者の、教育への期待と、子どもたちの将来展望に左右される。特に中国に住み続けるのか、日本に戻るのか、あるいは別の国に住むのかという想定、また子どもたちの帰属、などの相違が学校選択に影響を与えていた。

3.4.2 日本人学校での教育を選ぶ

調査対象者の半数強は、子どもに日本式の教育を与えていた。理由は、大まかに二つに分けられる。一つは、いずれ日本に帰る予定があり、子どもたちは日本人学校に通った方がよいと考えているため、もう一つは、具体的な帰国の計画はないけれど、中国の学校と比較して、日本人学校に長所を認めているためである。

上海では、日本人を対象とした教育機関が、日本人コミュニティの拡大に合わせて充実してきた。小学校入学前の幼児を対象とする日本人幼稚園は複数あり、日本人居住者向け

のコミュニティペーパーにも広告があげられている。幼稚園を卒業すると、2つの小学校、1つの中学をかかえる、世界でも最大規模の日本人学校がある。2011年には、日本人学校としては世界ではじめて高等部を開設し、義務教育を終えた日本人生徒の需要に応えることになった。日本人学校の近隣には、日系のディベロッパーが建設した高層アパートが建ち並び、日本から進出した大手を含む学習・進学塾、ピアノ、バレエなどの習い事、スーパーマーケットなども集中している。これは、日本人コミュニティが、日本人学校を中心に整備されていることを示している。

具体的に日本に戻る予定がある対象者が日本人学校を選択するのは、自然なことであろう。日本人学校は文部科学省の学習指導要領に準拠しているため、日本で子どもたちが通っていた学校とほぼ同じことを学べる。さらに、日本から派遣された教師、上海に駐在中の家族と来中した級友たちが周囲にいて、文具などの持ち物に至るまで、日本と同じ環境が確保される。

そのため一部の対象者にとって日本人学校の選択は、子どもと自分は日本社会に属しているという考えによる。日本への帰国についても、子どもたちの教育を重視し、子どもの受験を契機に日本に帰ろうと決めている者もいた。

イツコは、上海に来た2年前から、夫の親族が住む地域に住居を構えていたが、最近日本人学校のそばにあるマンションに転居した。以前の家は、日本人学校やそのそばにある塾に通うにはやや遠く、買い物なども地元の上海人が利用している場所へ行っていたため、彼女自身と子どもたちにとってストレスが大きかったという。転居によって彼女はすごく楽になったと考えており、高校進学のために日本に戻る予定についても、塾が受験の情報を十分に与えてくれるので、何の心配もないと語っていた。イツコは、夫自身は日本で働いていることもあり、彼やその親族が原発事故の影響に対してどのような評価をくだそうとも、長子の高校受験で絶対に日本に帰ると話していた。

チサコは、家族全員で上海に来てすでに5年がたっており、本来は子どもの中学進学時に日本に戻りたいと考えていた。しかし、他の調査対象者にも共通する傾向だが、日系企業で働く彼女の夫は、中国人であることに付随する能力やネットワークを期待され、当初思っていたよりも駐在員としての滞在が長引いていた。彼女は、家族は一緒に住む方がよいという思いから、夫一人を上海において帰国することをためらってきた。しかし、彼女は、子どもの高校は日本で、と決めてから、子どもたちの教育については、「日本に帰ったときに、たやすく日本社会に適応できる環境を用意してあげる」ことを重視していると話していた。

夫の仕事の都合で中国に転居した妻たちと同様、子どもたちも望んで中国に移住したわけではない。そのためチサコが話すように、子どもたちが中国で感じるカルチャー・ショックを和らげることも、日本人学校選択の理由の一つとなる。もともと外国語に堪能だったチサコは、子どもたちにも中国語教育を与える機会かもしれないと考え、まだ幼児だった次子は、中国語の幼稚園に通わせた。長子についても、中国語で授業を行う小学校を来中前は検討していたのだが、自分の母親から国外に転居するだけでも大変なのではないかと反対された。実際、子どもは日本人学校でさえも、カルチャー・ショックを強く感じていたので、現地校に行くのは無理だったろうとチサコは考えていた。

教育や言語の違いだけでなく、外国での生活は、たとえそれが父親の出身国であっても、子どもにはストレスの多いものである。イツコは以下のように語っていた。

多分主人がイメージしてる中国は、やっぱり自分の国で、すごい、すばらしい中国をイメージしてるんですよ。もう20年日本にいてね、中国にはたまにしか帰らないけど。その調子で子どもに話すから、子どもも多分いいイメージを抱くんだけど、実際自分達が住んだところっていうのは、こんなきれいじゃないんですよ。もう、分かるよね。もうマンションの中でもツバを吐いたりとかね、道も水とか汁気がいっぱい臭かったりとか。自分達はおばあちゃん達が住んでる近くだったからそういうところに最初に住んだから、(日本人が多い地域とは違って)すごい良かったんですよ。

これまで日本で教育を受けてきた子どもたちが、現地の学校に入る場合、中国語能力の不足によって苦労することも心配の1つとしてあげられる。中国の学校は一般に競争が激しく、中国語や学力が十分でない子どもに対する配慮に欠けると感じている対象者は少ない。中国人として、中国で教育を受けてきた夫自身が、やはりそのことを懸念して、日本式教育やインターナショナル・スクールを選択しているケースも複数あった。

シャオリーは上海出身の中国人女性で、日本留学中に日本人の夫と結婚し、娘と3人で東京に住んでいた。夫が上海で仕事に就いたため、一家は2010年に上海に移住したが、中国人の母親である彼女も、当時9歳だった娘を日本人学校に通わせていた。これは、娘は日常的な中国語を理解しているが、「日本人」だというアイデンティティを持っており、中国の小学校には適応できないだろう、と感じていたためだった。

また、小さな子どもを持つ対象者は、日本の幼稚園は、生活習慣を身につける上で優れていると考える者もいる。ワカコは、日本語の幼稚園と合わせて、地元の英語幼稚園やイ

インターナショナル幼稚園を見学した。彼女自身も幼い頃から英語を学んでおり、日本語を話さない夫がいるために家庭内言語は英語なので、当初はインターナショナルの幼稚園に通うのがよいのではないかと思っていたという。しかし、彼女の夫が、「しつけが一番ちゃんとしている」日本語幼稚園にこだわった。それは、勉強は大きくなってからでもできるが、「しつけとか考え方とか、身のこなしというのは、小さいときに入らなかったら、その後で簡単に身につけられるものではない」という考えからだった。彼女自身も、いくつかの園を見学するうちに、夫の考えに賛同し、日本人幼稚園を選んだという。

（ローカルの国際部を見学すると）、自分でどんどんアピールしていかないと、とか、後は結果的に勝った者の勝ち、というのは感じる。たとえば、バット、取った子の勝ち、その人が遊べる。日本だったら、じゃあそれ終わったらこの子に渡してあげようね、とかいうのは、（ローカルには）ないんですよね。（中略）あと、遊んだおもちゃは片づけるみたいなのは、インターとかローカルに行くと、先生のほかにアイさんってお手伝いさんが1人クラスにいるんですよ。それで子どもたちが遊んだ後のおもちゃを、その人がぱっかぱっか片づけていくんですよ。だから子どもたちは遊んだらそのまま、片づけなくても、はい、次、みたいになってもかまわないようなことが多い。でも日本だと、ほんとに片づけ終わるまで、みんな、という感じだから。（中略）まあこの子の場合は、性格が合ってる。あんまりがつつくタイプじゃないので、あまりそういうところに入れて、男の子とかだったらね、逆になんか、そうやって、どんどんのし上がって行くような、パワフルな子に育てるのもありかな、とも思うんですけど、この人は性格が、ちょっと、それだどつぶれてしまう感じなので、今のところであっているんじゃないかなというかんじで。

しかし、日本式教育への期待は十分に満たされているわけではない。たとえ日本人学校に行っても、中国に転居した子どもたちは多かれ少なかれカルチャー・ショックを経験することになる。チサコの子どもは、中国に転居して、日本では下校後友達と外で遊ぶのがあたりまえだった生活から、危険だからと室内でしか遊べなくなったことに大変落ち込んでいたという。また、日本人学校に通う生徒たちは、父親に日本への帰国辞令が出たら家族とともに日本に帰っていく。そのため、比較的長く上海にいるチサコの息子たちは、何度も帰って行く友達を見送る寂しさを味わった。

また、将来日本に戻る予定がない場合、日本語で教育を行う場合の将来展望を描くのは

難しい。子どもが小さいうちは、言語能力がそれほど高くないため、複数の言語をまたいで教育を受けることができるが、年齢が上がるにつれ、日本人学校に通う子どもは、高等教育も日本で受けることが前提となる傾向がある。うちの子は「日本人」だというイッコのように、中国語を母語とする父親やその親族とは距離が生じることも起こりうるだろう。ナミコは、子どもを日本人学校に通わせながら中国語力も習得させていたが、その過程では苦労もあったという。日本人学校の高等部は2013年7月現在まだ卒業生を出していないが、2012年の調査時には、おそらく生徒の多くが日本の大学に進学することになるだろうと言われていた。そのため、将来的に子どもの教育を日本国外でと考えている人にとって、日本人学校はベストの選択肢とはいえない。

3.4.2 中国の現地校への進学と、日本語力維持をめぐる葛藤

小学校以降も中国語で教育を受けている者は、16人の調査対象者中わずか2名と少なかった。他の言語で教育を受けている対象者と比べると、中国語での教育を選んだ者は、学校選択に中国人の夫が果たした役割が大きいという特徴を持っていた。

中国に20年以上住み、流暢な中国語を話すカズコは、平日は日系企業で働いているため、子どもの世話と家事のために、中国人のアイを雇い入れている。夫は留学と仕事で日本在住経験もあり、仕事では日本企業を顧客にしていることもあって、日本語を十分に話せるが、家庭内の言語は自然と中国語になってしまった。そのためカズコは母親として、娘の日本語習得に大きな不安を感じていた。彼女は子どもを連れて、日本の実家に年1度以上は戻っていたが、娘が幼稚園に通っている頃、母親（祖母）が、日本語で十分にコミュニケーションがとれていないことに気づき、日本語を学ばせる必要を感じたという。カズコは、娘を日本語教育の学校に通わせたいと考えていたが、夫は、娘は日本国籍であるにもかかわらず、中国人として中国語の学校に通わせるのがあたりまえだと主張した。カズコ自身は、日本と中国の両方の文化を持つ娘は、中国語だけでなく、日本語もきちんと身につけるべきだと様々な経験から考えるようになっており、今後日本語の塾に行かせることも検討している。しかし中国語で教育を受けるべきだという夫の意見は強く、「日本人学校に行かせる、とを考えてくれる余地はない」と感じていた。

エリコも子どもを中国語の学校に通わせている。エリコは日本で夫と知り合って結婚し、娘が産まれた。日本に住んでいた時、家庭内の言語は日本語だった。一家が上海に転居したとき、娘はまだ3歳だったが、夫は娘を中国語の幼稚園に通わせると決め、エリコもその決定を渋々受け入れた。当初娘は中国語がほとんど話せなかったが、幼稚園の教師は、

中国語を早く習得できるように、家庭でも中国語を話すように勧め、それまで日本語で話していた父子は、中国語で話すようになってしまった。また夫の母親が近隣に住み、娘とは揚州話で話している。学校と家庭の双方で、娘の使用言語に占める中国語の割合が急速に大きくなる中、エリコは一人で娘に日本語で話しかけ続けてきたが、自分の病気療養のために半年間日本にもどり、娘と話せない間に、娘は日本語を忘れてしまった。

何年かして娘の頭が中国語化し始めちゃって。私半年日本で（病気の）治療してたんですね。半年離れちゃったらもう娘は中国人になっちゃって。帰ったら中国語ばかりになっちゃって。それで帰ってきて何年かしてるから、私が話す言葉が分からなくなってきてしまったんですね、娘が。私が話してる言葉をパパに聞いているの。もうそれが辛くて。ああそうなんだと思って。そういう葛藤、ありますね。

エリコは、中国に来てからも、日本の通信教材等でひらがなを教えてきたが、この半年の空白のショックから、小学二年生以降は娘に週1回の国語の塾通いを始めたという。また、3年生以降は、中国の方が早く夏休みに入ることを利用して、6月末から1ヶ月間、毎年娘を連れて帰省し、実家近くの日本の小学校に娘を通わせているという。

このように、子どもが中国語の学校に通う場合、日本語の習得については、母親が1人で努力することが当然になってしまっている。その葛藤はなかなか夫や親族をはじめ周囲と共有されていない。

3.4.3 英語教育で中国と日本の双方から出るチャンスを与えたい

子どもに英語教育を受けさせている対象者は、将来的に日本に戻ることを重視していないという共通点をもつ。日本人学校は、日本のカリキュラムに合わせた授業内容であり、英語教育は限定的であるため、日本以外での進学という選択肢が狭まってしまう。また、中国では、外国籍の子どもは「外国人留学生」の枠で大学に進学するため、中国の学校制度で同じように高校（高中）を卒業しても、国籍を持つ同級生とは異なる受験をしなくてはならない。そのため、3分の1の調査対象者が、子どもたちを中国の学校の「国際部」とよばれる、外国籍の子どもたち（香港や台湾出身の生徒を含む）のための学校か、インターナショナル・スクールに通わせ、英語での教育を選択していた。

日系企業から駐在員として派遣されている夫たちが、いつかは日本への帰任を予定しながら、いつとは分からないという形で働いているのに対し、自分で、あるいは知人と共同

で会社を経営している場合、長期的に中国を拠点にして働くことを想定している。また、妻本人も夫も、様々な国や地域に居住し、仕事をしてきたコスモポリタ的な傾向があると、日本に対しても中国に対しても、住まなくてはならない場所とは感じていない。また、夫が日本語を話さない場合、家族は一緒に住むという前提を重視するならば、日本に帰るという選択肢はなくなる。こうした対象者は、子どもの教育言語に英語を選ぶことで、子どもたちが将来学業や仕事のために移り住む国や地域の選択肢を広げている。

他方、英語での教育を選択しても、不安から自由ではない。まず英語教育を行う学校には、選択肢が非常に多く、何が最善かを選ぶのがむずかしい。複数の対象者が、子どもの学校の様子をみながら転校を経験させている。学校の情報を共有する目的で、「現地校母の会」という集まりがもたれており、参加している母親も多かった。

また教育言語である英語、友人や親族と交流するための中国語と比べ、母親との間でしか使わない日本語を維持するのが難しいという悩みが共有されている。ここでも、「現地校母の会」を通じての子ども同士の交友関係が、日本語を話す機会として高く評価されていた。たとえば子ども同士が定期的に会って、日本のマンガや情報を交換し、日本語を話したいというモチベーションを維持させる機会がもたれている。さらに、日本や中国で大学に行くよりも、アメリカなど英語圏で大学に行く方が、費用がかかるという点も問題となる。マサコは、息子をオーストラリアの大学に通わせているが、現在英語で中等教育を受けている日本人の中にも、子どもを欧米の大学には通わせられず、かといって日本語や中国語などに教育言語を変更するのもできない人が出てくるのではないかと話していた。もちろん、日本の大学の一部は、「帰国子女入試」の制度を設けているので、これを利用して、日本で有名大学に進学する生徒もいるのだが、ここで課される日本語の小論文が書けるだけの日本語力がないと、合格は難しいという。

また、インターナショナル・スクールに通っている生徒と比べると、中国の国際部の英語コースに通う生徒は、英語力で少し劣ると考えられている。国際部に子どもが通っている対象者は、子どもたちが日中英の三カ国語話者であり、これは子ども自身の選択肢をひろげるものと評価されている。しかし、その分英語力を向上させる努力が必要であり、途中からインターナショナル・スクールに転校したり、英語圏に留学したりと、教育投資を行う者もあった。これもやはり費用のかかる選択であることは間違いない。

4 多様な社会を渡り歩く

本稿では上海に住む「国際結婚」の妻たちの多様な経験を、転居、仕事、子どもの教育

の3点から分析してきた。それでは、上海在住の期間が2年から15年以上と延びていくことで、上海での生活、特に中国社会との関係はどのように変化しているのだろうか。

調査対象者のうち、中国での生活は一時的だと考えている人たちは、日本に帰ることを前提に、上海でも日本人社会と強いつながりを保ちながら生活している。しかし、彼女たちもまた、日本人同士の夫婦が中心となる駐在員家庭に代表されるような「典型的」な日本人居住者に対して、距離を感じている。

居住地域を見ても、日本人学校のそばに立つ大規模マンションに住むことが多い日本人駐在員家庭と比べ、国際結婚の家族は様々な地域に散らばって暮らしている。これは、中国人である夫の両親と同居・同居する必要や、夫の親族ネットワークの助けを借りながら家を探したり、子育てをしたりしていることによる。上海のような大都市では、住む場所によって生活や交友関係が分断されているのである。

夫の両親と同居しているヤスコは、上海に移ってからしばらくの間は日本人の知人はなく、日本人と知り合いになりたいということにさえ気づかなかったという。娘の同級生に、たまたま母親が日本人の生徒がいて、その人から「現地校母の会」を教えてもらわなかったら、似たような経験を持つ日本人の知り合いは増えなかっただろうと話していた。また、原発事故の被害から上海に母子で転居したイツコは、夫の親族の近所で暮らしていた時期には、隣人たちは「日本人を見たことがないから市場に行っても話題になるくらい」、中国「ローカル」の社会で生活していた。

中国人と結婚して上海で暮らしている対象者たちは、日本人駐在員だけが集中する地域に住む、中核的な日本人とも、中国人とも、自分は異なっていると感じている。イツコは、日本人学校に通う子どもたちのお弁当について、以下のように話していた。

（日本人学校は）お弁当持参なんですよ。給食じゃないから。お弁当見れば人種がわかるんですよ。（中略）中国人ママが入れのお弁当は、仕切りのアルミを敷かずののっけ弁当。（日本人駐在員の家庭では）チーズとかが流行ってたら、同じチーズが皆に入ってくるの。行く店が決まってるから。うちはどっちだ？って言ったら、その時おばあちゃんがちょっと（お弁当を）入れてたから、アルミで仕切るけども、中身は中華だった。

イツコやエリコは、子どもたちの交友関係についても、同じように家庭の状況によって区切られていると感じている。彼女たちは地元の中国人に対して、自分たちとは異なって

いると感じながらも、何年上海に住んでも、バスは危険だからと乗ったこともない日本人女性たちにも、違和感を覚えている、自分たちは、生活の中で「バスに乗らざるを得ない」のであり、バスに乗るのか？という質問自体が意味を持たないためである。

日本人学校にいる子達は結局、日本人の駐在員でいいところに住んでいる（子どもたち）、もうほぼ中国人に近い子達、それと、海外経験が多くてって感じの、3種類ぐらいにもう層が分かれちゃうんです。超高級な、いい肩書きを持って人達はいいところに住んで、そのマンションからは出ない生活をするんです。マンションの敷地が完全に警備員もいて、クーラーも効いてって、月に3万円とか4万円とか払ってそういうところに住んでる人達は子どもを外に出したがりませんよ。危ないっていう感覚があるから。遊ぶんだったら中で遊ぶんですね。だからそこの中でできあがっちゃうんですよ。それで、逆に中国人のママがいるような人達っていったら、上海の全然違うところから来るんですよ。だから交友関係は多分その家の中だけか、適当に周りが持つぐらい。そんなない感じ。で、うちぐらいの中途半端なね、高くもなく安くもないマンションだったら、まあ出たかったら出るしっていう、ちょっとフリーな感じはあるんです。（イツコ）

結婚前から中国で生活していた対象者は、中国内に日本人、中国人双方と様々なネットワークをすでに持っている点が、結婚後夫の仕事の都合で転居した人とは異なっている。しかし、仕事を中心とする人間関係に加え、育児や教育に関わる情報を入手するために、従来の友人関係とは異なるネットワークを築く必要を感じているようだった。タエコは、日本人が集中する地域に転居したら、日本語の児童書を集めた図書館が近所にあり、子育ての情報を得やすくなったと感じていた。

中国は、女性が結婚や出産の後に仕事を続けることが一般的ではあるが、働く母親に対する公的なサポートが特に充実しているわけではない。日本と比べて出産に関わる休業規定が短く、保育園に乳児を預けて働くということは一般的とはいえないが、幼稚園でも、夕方5時頃まで子どもを預かることが多い。そのため、家庭にもよるが2、3歳までは、夫婦の双方が家庭外の賃労働につく場合、親族の協力を得るか、アイ（阿姨）とよばれる家事労働者を雇用するかして、個人的に子育てと仕事の両立を図らなくてはならないのである。外国での育児では、日本に住んでいる自分の両親に子育てを手助けしてもらうのが難しいという悩みも共有されている。

夫が上海やその近郊出身の者、また地方に住む両親を上海に呼び寄せている者は、子どもを持つことによって夫親族との関わりは強まったと感じていた。アヤコは、第一子の出産からしばらくの間、夫の母がほぼ住み込みで子育てを援助してくれたので、日中間の文化や習慣の相違には戸惑いつつも、助かったと語っていた。ハナコも、近居の夫両親が平日の子どもの面倒を見ている。この2人は、夫の親族が「他人は信頼できない」とアイを雇うことに否定的だという共通点がある。そのため、子どもをめぐる慣習や文化の違いが、問題を生むこともある。ハナコは、平日はほとんど夫の両親が子どもの面倒をみているため、休日には子どもと一緒に外出することが多く、「私たちは子どもをめぐる戦ってるんです」と話していた。アイを雇っていても、サチコのように留守中に夫の両親がしょっちゅう孫を見に来ていたという者もいた。

他方、地方に住んでいる夫の両親は上海にはあまり来ないため、子どもの世話のためにアイを雇う以外の選択肢がないという者もいる。外国人家事労働者が住み込むことが多い香港やシンガポールとは異なり、上海では地方から出稼ぎに来ている中国人女性を、通いで雇うことが一般的である。乳幼児を一日中見てもらうと言うことで、複数名を面接して慎重に選んだというサチコのようなケースもあれば、すでに子どもも成長しているので、掃除等の家事の一部を依頼し、しかも日本食しか食べない子どものために、食事は自分が作っているというリサコのようなケースもあり、アイへの依存度は様々である。ヤスコは、日本では一般的とはいえないアイの雇用が、子どもに悪影響を及ぼすことを懸念して、子どもの部屋は掃除させない、子どもがアイに用事を言いつけることを禁じていると言っていた。しかし、アイを雇うのが当然な中国社会で育ってきた義父母のアイへの接し方に、戸惑いを覚えることもあった。

5 結論

本稿では、16人の国際結婚移住者に対するインタビューを分析した。この調査のデータは限定的ではあるが、彼女たちの経験が非常に多様であり、かつ複雑な側面を持つことが分かった。

まず、自分自身で中国に住みたいと思って移住してきた者と、夫の仕事や決断に従って上海に移った者がいる。一部は、これからも長期的に上海に住み続けるつもりであり、同じく国際結婚をしている仲間同士で、墓をどうするのが話題に上ることがあるという。他方で、日本企業の駐在員である夫に帰国の辞令が出るのはいつになるのか分からないため、子どもの受験に合わせて、数年内に夫を残して帰国すると決めている者もいた。こう

した将来展望は、現在の上海での生活にも影響を与えていた。子どもたちの学校、住居、日常的な交友関係などは、こうした認識に基づいて選ばれていた。

16人の結婚移住者の経験はこのように多様だったが、同時に彼らは様々な経験を共有していた。日中間の経済関係が密接化したことが、一度は日本や欧米に移住した中国人や、日本企業社会のジェンダー役割分業に戸惑う女性を、上海にひきつけていた。中国での生活を肯定的に語る者もいるが、多くの人は自分の人生をコントロールすることに難しさを感じていた。

なぜ上海に来たのかという理由や、そこに自分の意志が介在しているか否かによらず、海外への移住は家族や子どもたちに大きな影響を及ぼしている。複数の文化が共存する家庭内で、主に母親が子どもたちの文化間葛藤を最小にすべく努力をしている様子が、インタビューで明らかになった。その努力は同時に、彼女たちが自分のキャリアを追求することを妨げていた。

1985年に雇用機会均等法が成立し、日本における職場と家庭におけるジェンダー分業は、その以前と比べると弱まっているように見える。女性のライフスタイルは多様化し、賃金労働につく者も増えた。景気の停滞は共働きの世帯を増やしており、子育てへの公的な支援も日本では増大してきたといっていよう。

しかし、女性にとって国境を越える方法は、依然として男性とは異なっている。就労ビザのとりにくさ、文化や言語的な相違に適応する努力が、移住の前に立ちふさがる。特に国際結婚移住では、母親として、多文化環境にある子どものカルチャー・ショックを和らげ、将来の社会適応に十分な教育機会を与えなくてはならない。自分自身のキャリアよりも家族への義務を重視することを受け入れている女性もいるが、これに不満を覚えている者もある。子どもたちの面倒を見るのは好きだし、自分は母親という役割に向いているという者も、自分自身の教育や就労経験は十分に生かされていないと感じていた。

今日、グローバリゼーションは多様な人々に、国境を越える経験をもたらしている。上海のようなグローバル都市では、こうした多様な人々が出会い、関わり合うことで、あらたな文化が生みだされている。日中間の結婚移民は、このようなグローバリゼーションによって可能になると同時に、その葛藤や矛盾を体現しているのである。しかし、結婚を介しているために、この移住は個人的な選択と見なされてしまい、母親の努力や困難は、個人が解決すべき問題とされる。本稿で分析した人々は、相対的に豊かな生活を送っているため、問題を抱えているとはみなされていないが、やはり、国境を越えることによる困難に直面していた。

ここに分析した女性たちの生活を通して、私たちは、国境を越える結婚や家族の経験を理解することが可能になる。こうした事例を通して、グローバリゼーションのもとで変容する家族をとりまく問題に対する公的なサポートの構築を検討する必要があるだろう。

参考文献

- Constable, Nicole ed., (2005) *Cross-border Marriages: Gender and Mobility in Transnational Asia*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Denzin, Norman K., (2010), “Grounded and Indigenous Theories and the Politics of Pragmatism,” *Sociological Inquiry*, Vol.80, No.2, May 2010, pp.296-312.
- Denzin, Norman K., (2012) “Triangulation 2.0,” *Journal of Mixed Methods Research*, vol.6, no.2, p.80-88.
- 嘉本伊都子 (2008) 『国際結婚論?』 法律文化社.
- Kelsky, Karen, (2001) *Women on the Verge*, Duke University Press.
- 外務省 (2012) 『海外在留邦人数調査統計』
(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/12/pdfs/WebBrowse.pdf>)
- Morocvacic, Mirjana (1984) “Birds of Passage are also Women...,” *International Migration Review*, Vol.18, No.4, Special Issue: Women in Migration, pp.886-907.
- Parremās, Rhacel Salazar (2001) *Servants of Globalization: Women, Migration, and Domestic Work*, Stanford: Stanford University Press.
- Piper, Nicole (2003) “‘Birds of passage’ also in Asia: Women and Labour migration from a regional perspective”, *Development bulletin*, Vol.62, pp.30-33.
- Piper, Nicole and Amber French (2011) “Do Women Benefit from Migration?: An Editorial Introduction” *Diversities*, Vol.13, No.1, UNESCO.
- 山下晋司 (1996) 『移動の民族誌』 岩波書店.

—2013.8.5受稿—

付表1

仮名	対象選択の方法	中国移住年	結婚年	出会った場所	仕事
アヤコ	1	2006	2008	上海	企業勤め
カズコ	1	1986/1996	2003	上海	企業勤め
サチコ	1	2001	2008	上海	企業勤め
タエコ	1	2000（北京）	2009	北京	企業勤め
ナミコ	1	1996	1996	日本	経営
シャオリー	1	2010	2001	日本	企業勤め
ハナコ	2	2003	2010	上海	企業勤め
マサコ	3	1992（北京）	不明	北京	主婦
ヤスコ	3	2003	1999	日本	フリーランス
リサコ	2	2002	1988?	ヨーロッパ	企業勤め
ワカコ	2	2004	2006	ヨーロッパ	主婦
チサコ	2	2007	1990年代	日本	主婦
エリコ	2	2005	2000	日本	主婦
イツコ	3	2011	不明	日本	主婦
フミコ	3	2006	2008	上海	主婦
マリコ	3	2005	2007	オーストラリア	主婦